

文庫、2009年。

十四、福田歓一、『政治学史』、東京大学出版会、1985年。

十五、桃木至朗他編集、『新版・東南アジアを知る事典』、平凡社、2008年

十六、和田久徳、「東南アジアの都市と商業 - マラッカの場合 -」、『中世史講座、第3巻』、学生社、昭和57年

#### 外国語文献

- 1、Anthony Millner. *The Malays*. 3rd ed., Willy- Blackwell, 2011, (1st ed, 2008).
- 2、Id, *Kerajaan-Malay political culture on the eve of colonial rule*, 2nd ed, SIRD, 2016 (1st ed 1982).
- 3、Anthony Reid, *A History of Southeast Asia* (Blackwell History of the World, Wiley. Kindle Edition, 2015.
- 4、Id, *Southeast Asia in the age of commerce 1450-1680 Volume two expansion and crisis*, Yale university press, 1993.
- 5、Barbara Watson Andaya, Lenoard Y. Andaya, *A history of Malaysia*, 3rd ed, Palgrave Macmillan, 2017 (1st ed, 1982).
- 6、Edward W Said, *Culture and Nationalism*, Knopf, 1993. (E・W・サイード著、大橋洋一訳、『文化と帝国主義1』みすず書房、1998年。
- 7、J. Kathirithamby Wells, John Villiers (ed), *The Southeast Asian Port and Polity: Rise and Demise*, Singapore university press, 1990.
- 8、Mazanah Mohamad, Syed Muhd khairudin Aljunied (ed), *Melayu: the politics, poetics and paradoxes of Malayness*, National university of Singapore, 2011.

## 2019・2020年度 政治学研究会

政治学研究科では、以下のように研究会を開催しました。(肩書きは当時)

#### 2019年度

- 第1回 4月26日(木) 浅羽隆史(本学法学部教授)  
「武蔵野市財政の現状と地域共生社会構築へ向けた政策の持続可能性向上策」
- 第2回 5月23日(木) 亀嶋庸一(本学学園長)  
「成蹊大学法学部編『教養としての政治学入門』を読む」
- 第3回 6月22日(土) 西山隆行(本学法学部教授)  
「M・ウォルツァー『アメリカ左派の外交政策』を読む」
- 第4回 7月27日(土) 李曉東(島根県立大学総合政策学部教授)  
「李曉東『現代中国の省察』—自著を語る」
- 第5回 10月17日(木) 渡邊弘明(ICU大学院博士後期課程)  
「バーリンとロシアの思想家たち  
—ゲルツェン・プレハーノフ・ナロードニキの理論家—」
- 第6回 11月14日(木) 立石洋子(本学法学部助教)  
「ユーリー・コスチャシヨーフ『相応された「故郷」  
—ケニーヒスベルクからカーニングラードへ』を語る」

## 編集後記

第7回 1月16日(木) 橋場典子(本学法学部助教)  
「社会的排除と法システム」

第8回 1月30日(木) 馬上美知(本学教職課程准教授兼法学部教養課程  
准教授)  
「マーサ・ヌスバウムの思想と教育」

### 2020年度

第1回 7月12日(木) 光田剛(本学法学部教授)  
「盧溝橋への道：日中戦争前夜の華北」

第2回 9月24日(木) 羽鳥拓志(本学法学政治学研究科博士前期課程)  
「教育における政治的中立—後期ロールズの理論から」

第3回 10月8日(木) 亀嶋庸一(本学学園長)  
書評会「野口雅弘『マックス・ウェーバー—近代と格闘した思想家』」

第4回 11月12日(木) 福田宏(成城大学法学部准教授)  
書評会「立石洋子『スターリン時代の記憶—ソ連解体後ロシアの  
歴史認識論争』」

第5回 1月14日(木) 西山隆行(本学法学部教授)  
「2020年アメリカ大統領選挙とアメリカの政治社会の分断」

『法学政治学研究』第46号をお届けします。

本号は二編の論文を掲載しています。これらの論稿が学界の発展に寄与することを願います。

昨今、現役の大学院生も減少し、本誌の存続も危ぶまれております。今後、多くの研究成果が本誌に発表されることを期待しております。

本誌の編集は、コロナ禍という特異な状況のなか、本学修士課程在学中の羽鳥拓志さんが担ってくださいました。記して感謝申し上げます。

板橋拓己